

# モモ枯死症の発生抑制に向けて(第4報) モモ胴枯病の発生を抑える管理技術について

令和4年3月  
山梨県果樹試験場

モモの若木が枯死してしまう「枯死症」の被害樹を調査した結果、「モモ胴枯病」の発生事例が多数確認された。そこで、枯死症の一因となりうる胴枯病について、基本的な生態や病徴、発生を抑えるための栽培管理方法等を取りまとめた。

## I. モモ胴枯病とは

- 糸状菌(*Leucostoma persoonii*)による病害。
- 感染部の樹皮は、はじめ表面がわずかに膨らみ、指で押すと柔らかく感じられる。樹皮を剥くと内部は褐変しており、アルコールのような臭いがする。
- 症状が進むと樹皮はややくぼみ、表皮を持ち上げるように細かい粒(子座)が現れる(図1)。樹皮を剥いだ状態では、子座は目玉のように見える(図2)。
- 降雨が続いたり、湿度が高まると、子座内の黒い柄子殻の先端から、赤褐色で糸状の孢子角(孢子の塊)を出す(図3)。
- 孢子は雨水に混じって飛散する。孢子の飛散は通年で見られ、春季や秋季に飛散量が増加する傾向がある。
- 小枝に発生した場合は、枝枯れを引き起こす(図4)。
- 太い枝や主幹に発生し、枝周や幹周を病斑がとりまくと、病斑部から先の枝や、樹全体が枯死してしまう。

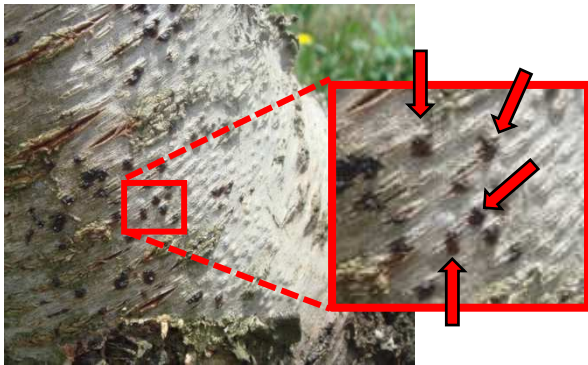


図1 樹皮上に現れた子座(矢印)

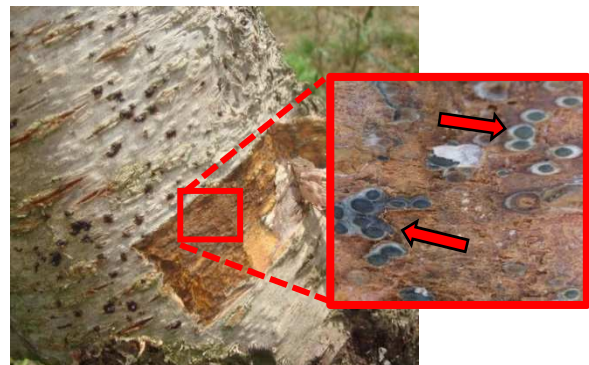


図2 樹皮下が褐変した主幹部と子座(矢印)



図3 柄子殻から伸びる孢子角(矢印)



図4 枝に発生した胴枯病

## II. 胴枯病の発生を抑える栽培管理方法

○胴枯病菌は樹体の傷口などから侵入するため、侵入門戸となる剪定切り口や傷口は早く治す・樹体に傷をつくらないことが重要。

- ・基部を残さない「すり切り剪定」は、基部を残す「切り残し剪定」に比べ、切り口のゆ合(カルスの形成)が進みやすい(表1)。
- ・切り口や傷口には、ゆ合促進剤(トップジンMペースト：使用回数3回まで)を塗布するとゆ合が進みやすく、胴枯病菌の感染率が低くなる(表2および図5)。
- ・添え木で樹をこすったり、草刈り機等の機械で樹を傷つけないよう注意する(図6)。

表1 剪定方法の違いが切り口<sup>\*1</sup>のゆ合に及ぼす影響(2019~2021年平均)

剪定方法	ゆ合した <sup>*2</sup> 切り口の割合(%)
すり切り	100.0
切り残し	16.2

\*1切り口にはトップジンMペーストを塗布した。

\*2カルスの形成がわずかでも見られたものを含む。

表2 薬剤等の処理による切り口<sup>\*1</sup>のゆ合状況(2019年)

供試剤	ゆ合度 <sup>*2</sup>	胴枯病菌 感染率(%) <sup>*3</sup>
トップジンMペースト	77.6	17.6
バッチレート	68.4	57.9
木工用ボンド	58.7	80.0
無処理	50.0	94.4

\*1剪定方法はすべてすり切り。各剤15~19の切り口を供試。

\*2数字が100に近いほどゆ合が進んだことを表す。

\*3薬剤処理後に胴枯病菌を接種。



図5 供試剤を塗布して胴枯病菌を接種した切り口の様子



図6 添木によって樹体にできた傷

○圃場の衛生管理に努める。

- ・枯死、伐採した樹体は、胴枯病やその他の病気の伝染源になるため、放置せず、圃場外へ持ち出して適切に処分する。

## III. 胴枯病が発生してしまったら・・・

○病斑の大きさによっては、以下の手順に従って病斑の削り取りを行うことで、枯死を防ぐことができる(図7)。

- ①胴枯病の病斑部分の樹皮を剥ぎ、周辺の健全部が露出するまで病斑を丁寧に削り取る。
- ②削り取った傷口と周辺の健全部に、トップジンMペーストを広く十分塗布し、ゆ合を促進する。
- ③処理は、樹の生育が旺盛な春先~初夏にかけて行う。

※主幹や主枝などを取り巻くほど病斑が広がった樹では、樹勢回復の見込みが低いため、早めに伐採してほ場から持ち出し適切に処分する。



図7 病斑の削り取りとトップジンMペーストの塗布処理後のゆ合状況(赤色線は病斑と健全部の境)